

(曾於郡志布志町安楽字中原)

位置と環境

本遺跡は町の中心部から北西に約3km離れた旧安楽駅東側の曲瀬台地辺縁部に位置し、東から西へ開く小さい谷の谷頭に立地している。遺跡地は標高約50mの台地一帯である。

調査の経緯

発掘調査は個人の宅地造成に伴い、国・県の補助を得て、志布志町教育委員会が調査主体となり、県教育委員会の協力を得て、昭和59年（西暦1984年）に実施した。

遺構と遺物

調査の結果、旧石器時代細石刃文化期、縄文時代早期・中期・後期の遺物等が出土している。

本遺跡の主体を占める出土遺物は、縄文時代中期末から後期の比較的限定されているが遺物の種類も多く、その出土量は膨大である。

旧石器時代の遺物は、細石核2点、縄文時代早期の遺物は、少量であるが、前平式・吉田式の貝殻文系の円筒形土器、撚糸文系の塞ノ神式土器等が出土した。

縄文時代中期末から後期の遺物には、南福寺下層式類似・阿高式系・中津式類似・福田KII式・縁帯文土器類似・彦崎KI式酷似・津雲A式酷似・指宿式・倉園A式・一湊松山式・市来式等の土器、石斧・石錘・敲石・磨石・石皿・軽石製調整具等の石器が



第1図 中原遺跡の位置

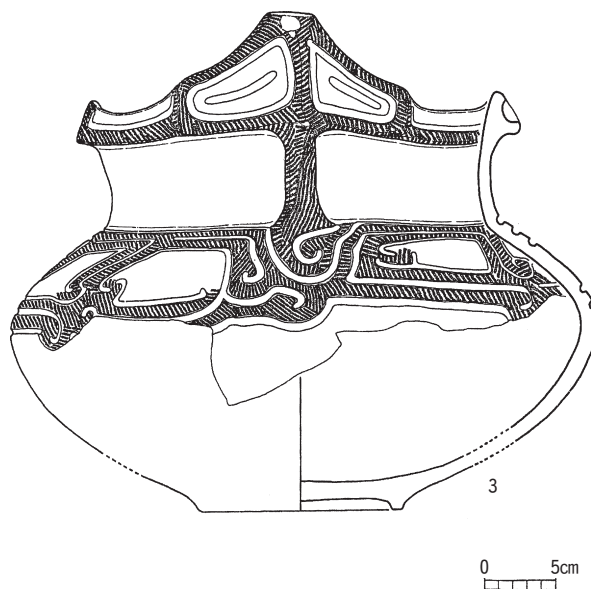
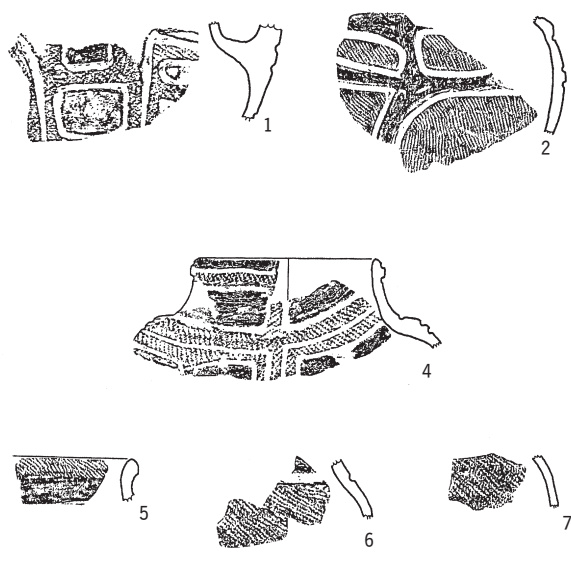
出土している。

縄文時代の中期末から後期の土器で、特に注目されるものには、瀬戸内地方の磨消縄文系の土器と南九州の在地系土器が多量に検出されたことである。

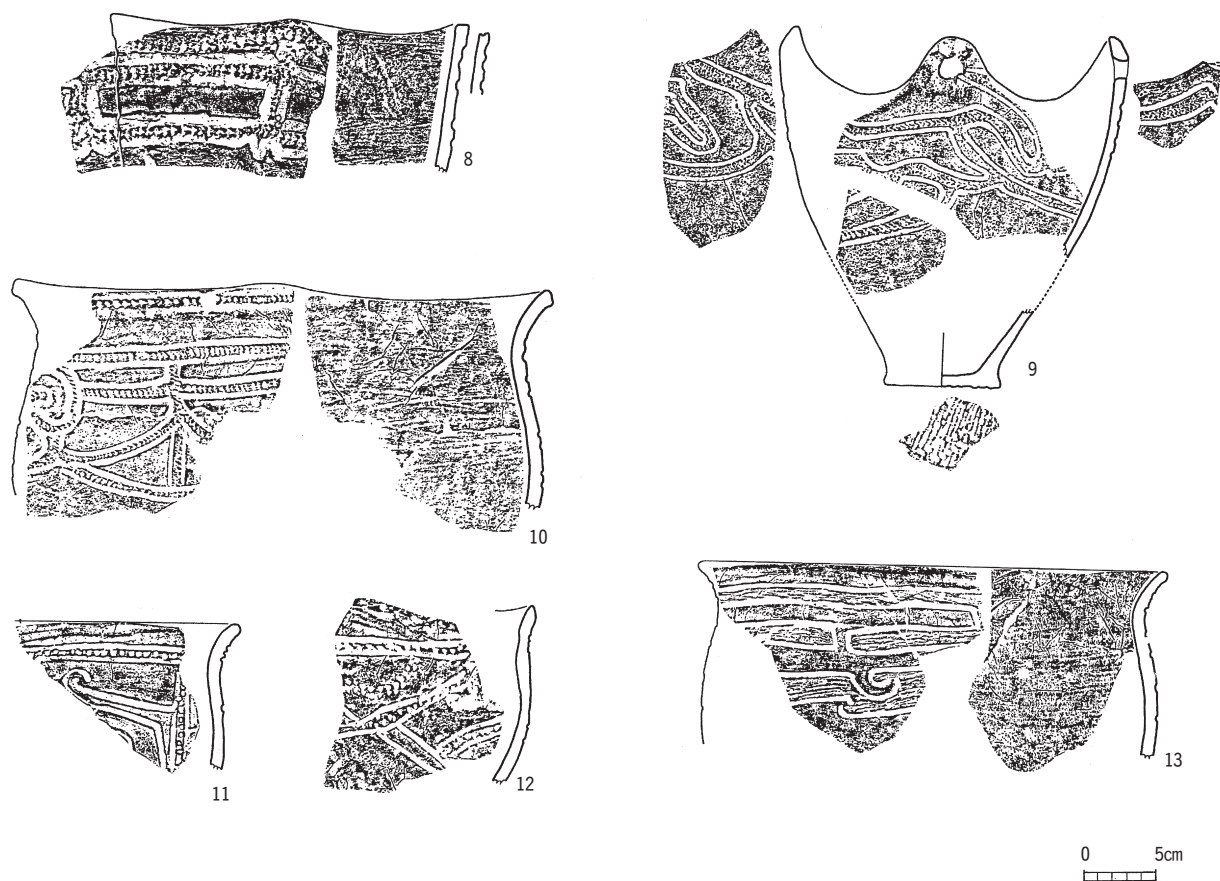
磨消縄文系土器に幅広の縄文帯を施す中津式類似土器（第2図1・2）、3本沈線間に縄文を施す福田KII式土器（第2図3・4）、彦崎KI式、津雲A式酷似（第2図5～7）等が出土し、擬似縄文土器も出土している。（磨消縄文土器の影響を受けたと考えられる在地系土器が擬似縄文土器である）

擬似縄文土器には、凹線文間に縄文の代わりに連続した貝殻刺突文（第3図8～10）、連点刺突文（第3図11・12）を施文するものがある。これらの刺突文は、通常、凹線文に対して直角に施されるが並行に施文されるもの（第3図13）も出土している。

本遺跡で出土した在地系土器（擬似縄文も包括す



第2図 出土遺物



第3図 出土遺物

る。)は、形態的特徴・文様構成等を観察すると、南九州の在地系土器文化が磨消縄文土器文化の影響を強く受けていることが判明した。

特に注目されるものに、縄文時代の中期末から後期にかけての石器の組成がある。

石器には、石斧・敲石・磨石・石皿・石錘等があり、いわゆる狩猟具として代表的な石器である石鏃・石槍・石匙等は出土していないことである。

また、この傾向は、ほぼ同時期である他地域の遺跡でも同様に認められ、当時の生産様式を窺い知るうえで興味深い内容となっている。

本遺跡のもうひとつの特徴には、通称メンコと呼ばれる土製加工品1081点（第4図14～19）、石錘404点（第4図20～28）が多量に出土していることがあげられる。

特に、土製加工品は一遺跡の出土量としては極めて多く、類例は少ないようである。

土製加工品は在地系土器である指宿式土器片の二次加工品が主体を占めるが、出土型式すべてが確認されている。

穿孔したもの（第4図14）と穿孔途中のもの（第

4図19）が20点程確認されており、使用目的・用途の解明を含めて注目される。

また、軽石調整具（第4図29・30）と呼称された土器の器面調整具と考えられるものも、具体的な資料として発見された。

軽石を使った石製品の中には、女性器・男性器（第4図31・32）を模したものや勾玉等も出土している。この時期の精神文化の一端を知るうえで貴重な資料である。

特徴

瀬戸内地方の磨消縄文系土器と南九州在地系土器が多量に出土したことが本遺跡の特徴である。

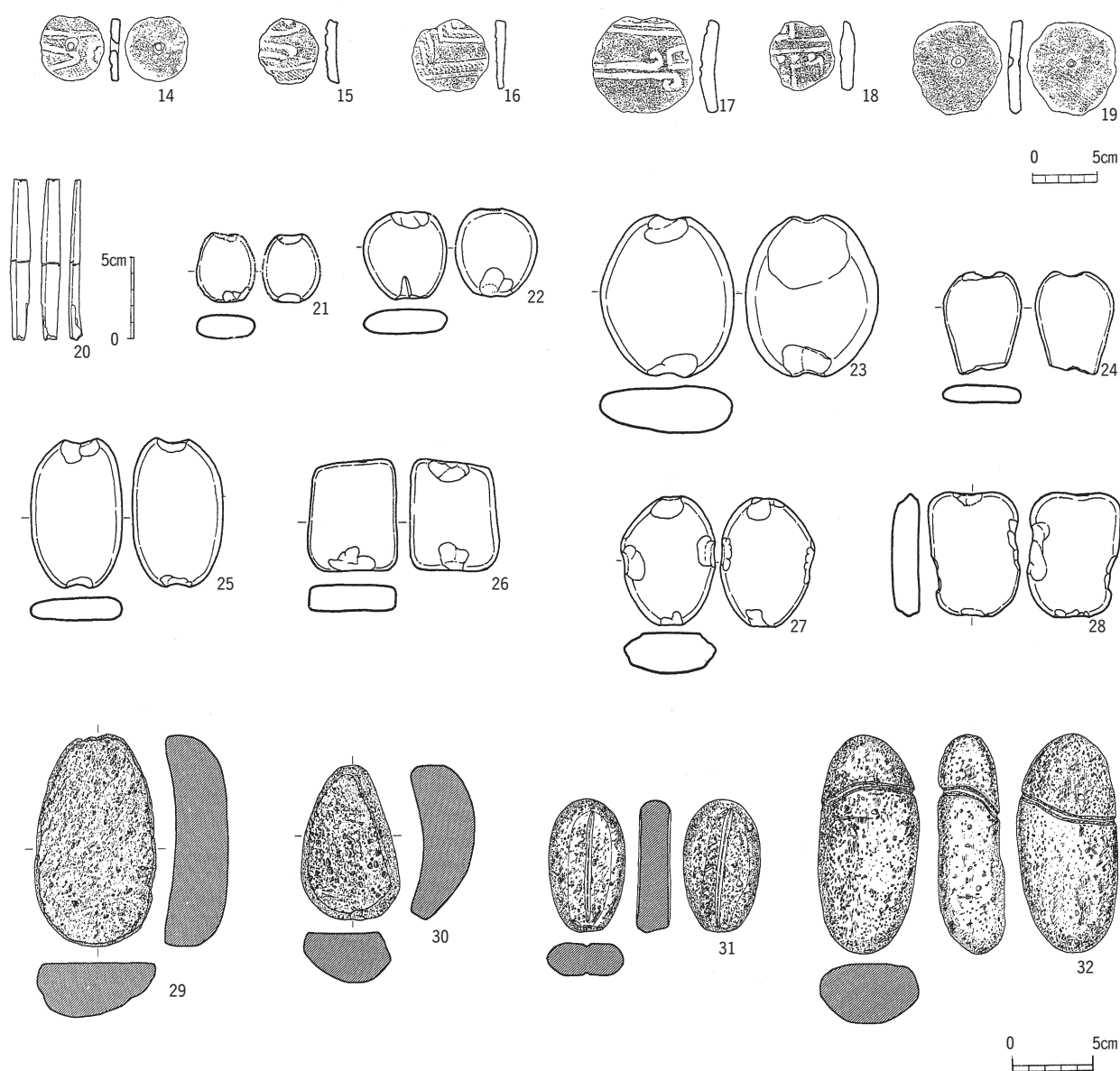
また、石錘の出土量等から川や海での漁労との関わり合いが深いことが推察され、磨消縄文文化の海路伝播を想定することができる。

資料の所在

出土遺物は、志布志町教育委員会に保管されている。

参考文献

志布志町教育委員会1985「中原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』9（小村美義）



第4図 出土遺物